2026 年 3 月 1 日 国際
学部外国語学科英米語専攻
椿野朗央ムハンマド

留学報告書

① 大学や町の様子

私が留学したサンティアゴ・デ・コンポステラ大学は、スペイン北西部ガリシア州に位置しており、町全体は陽気な雰囲気でした。大学周辺には食料品店や雑貨屋が多く、生活する上で非常に便利であった。特に印象的だったのは毎週土曜日に行われる聖人を祭るパレードで、日本との違いを感じた。治安や物価については治安は非常によく物価は日本の 2 倍で外食はあまりできなかったが、全体として過ごしやすかったと感じた。

② 授業について

履修した授業は主に言語分野で、地方言語のガリシア語と古語のラテン語とその歴史文化を学びました。授業は講義形式とディスカッションが両立しており、日本の授業と比べて主体性が求められる点が特徴的だった。大変だったことは現地使用言語で、特にガリシア語に苦労した。授業内では基本方言が使われるために事前に学習していたカスティリャ語では歯が立たなかった。留学前のリサーチ不足が悔やまれた。

③ 生活について

私はシェアハウスで生活していた。ハウスメイトとは共通言語で英語、西語そして相互の母語であるトルコ語と日本語を介してコミュニケーションをとっていた。日常生活では学校がない時間は外出し目的なしに街を散策することが多く、週末は持参したロードバイク、時折電車で越境し隣町に行き観光し過ごした。目に映った風景を一眼レフに収めていた。現地で知り合った者とは、会話を通して異文化理解を深めることができた。日本との生活の違いで印象に残っているのはスペイン人の多くは温和でよく旅先で話しかけられたことだ。

④ 留学を終えて

留学前は西欧の国では人種差別が多いというイメージだったが、振り返ってみれば皆親切で自分が偏見をもっていたことに腹を立てざるおえなかった。実際、日本の対蹠点寄りの国

を留学前は足りない部分は想像で補い色眼鏡でしか見られなかった自分だが、いざ現地に足を付けてからというもの、その異国の地はかつての黄金期に劣らぬ色鮮やかな世界を持っており触れるものすべてに感銘を受けたものである。豊かな民族性から生まれた食文化、建築文化、言語文化が歴史として今もなお鮮明に活き渡っていた。特に歴史的建造物に目がない私は行ける範囲で赴き直に目に通し、直に触れ当時の背景を想い景色を楽しんだ。その中で一際浮き彫りになってきたのは地域ごとで民族思想があり、また独立意識が強い地域、とりわけ地中海側にあるカタルーニャ地方がそれにあたる。兼ねてより独立問題を抱えていることは既知ではあったが、少なくとも私が交流した者は国家の公用語であるカスティリャ語に抵抗があるようで、地方言語であるカタルーニャ語を使う傾向が高いようであった。やはり、そうした背景には見えない民族闘争があり悲しくも先進国でもそうした事案は起こりうるのだと実感させられた。そうした問題を解決する立場に将来携わりたいとより一層意識が高まった。

⑤　これから留学する人へのアドバイス

留学前の準備としてその地方言語はもちろん西語は予習しておくことを強く推奨する。英語は一部地域、公共施設を除き使用されないため予備知識程度に修めるとよい。また、現地では現地の伝統に遵守すること心がけることを忘れてはならない。積極的に現地民や留学生と交流をすることで有事に助け合える他、外国語習得が加速することが可能となりより充実した留学生活の実現につながるだろう。

写真





